

相良匡俊先生のこと（特集 相良匡俊氏寄贈シャンソン関連資料）

著者	田中 優子
雑誌名	ライブラリーレポート
号	4
ページ	31-32
発行年	2016
出版者	東京音楽大学附属図書館
ISSN	2188-4706
著者版フラグ	publisher
URL	http://id.nii.ac.jp/1300/00001248/



相良匡俊先生のこと

法政大学総長

田中 優子

相良匡俊法政大学名誉教授は、19世紀のフランスを中心にしたヨーロッパ史の専門家であった。江戸学者の私とは分野が違ったのである。当初は所属学部も異なっていた。たびたび顔を合わせたのは、入試作業においてである。私は20代で大学教員になって以来ずっと国語の出題者で、のちには日本史も手伝っていた。相良先生は世界史の出題者で責任者でもあった。それぞれの組織が改組されて社会学部で同僚となったが、そのときも主に入試でご一緒した。なぜそのことを書くかという、定年退職まで先生は世界史の責任者として絶大な信頼があり、定年退職なさったときは、皆「どうしよう!」と青ざめたからである。シャンソンを愛し革命に憧れるロマンチストというだけではない。緻密で管理的な仕事もきちとなさったのだった。

法政大学に国際日本学インスティテュートという大学院組織ができたときも、管理者としての能力を発揮なさった。それだけではなく、恐れずに、むしろ楽しんで新しい状況に飛び込んでいくかただった。このインスティテュートは人文科学研究科の教員たちと、政治学研究科、社会学研究科の教員たちによって構成されていて、相良先生は社会学研究科からその責任を担った。留学生のために作られたこの新しい横断的な組織の運営がいかにたいへんなものか、のちに相良先生に誘われて入った私はとことん知ることになった。日本語の能力が十分でない学生たちをひとりひとり導き、教員どうしの連携を強め、新しい教員を学部から誘い、日本学の面白さを学生たちに伝え、大学院組織との調整に努める。このすべてを、運営委員長となった相良先生はひとりで担ったのである。その後、その役目を引き継ぐことになった私を、全面的にサポートして下さり、安定的な組織に変えるまでを、ともに走って下さった。

なぜ相良先生が日本学?と思うかも知れないが、世界の様々なところから来る学生たちに、比較の視点と方法で日本のことを教えることのできる教員は、そう多くはなかったからである。相良先生は明治以来の日本の教育組織から警察組織まで、ありとあらゆることを学生に教えていらした。なんでもしなければならぬこの大学院で、私もまたなんでも教えるようになったが、それは毎日新しい勉強をし続ける、たいへん面白い日々でもあったのだ。

相良先生は江戸時代にも関心をもって下さり、昔からのお知り合いの歌舞伎役者さんを学生たちに紹介して下さったり、ご先祖のお話も興味深かった。多方面に関心を持って楽しむ知性をお持ちだったのである。そういうかたこそが、学生たちに知る面白さを伝えることができる。

あらゆる意味で、法政大学に多大な貢献をして下さった。

しかし、シャンソンに関するこれほどのコレクションをお持ちだとは、存じ上げなかった。楽譜 289 点、和書 51 点、洋書 975 点、録音資料 116 点、合計 1,431 点。残念ながらこれを活用するのは本学の学生や教員ではない、と思った。そこで社会学部の伊集院立名誉教授や、文学部の小林ふみ子教授のご尽力で、東京音大に収まったのである。

このことを知っていれば、江戸の歌とシャンソンとの比較など、もっと話題は広がったかも知れない。亡くなったあと、「もっといろいろなこととお話したかった。伺ったことを書き留めておけばよかった」などの思いをひきずっている。

ともかく、これら貴重な資料がまとまって所蔵されたことは、たいへん意義がある。今後も機会があるごとに、この所蔵をたよりに、相良先生のめざしたものと、対話していきたい。